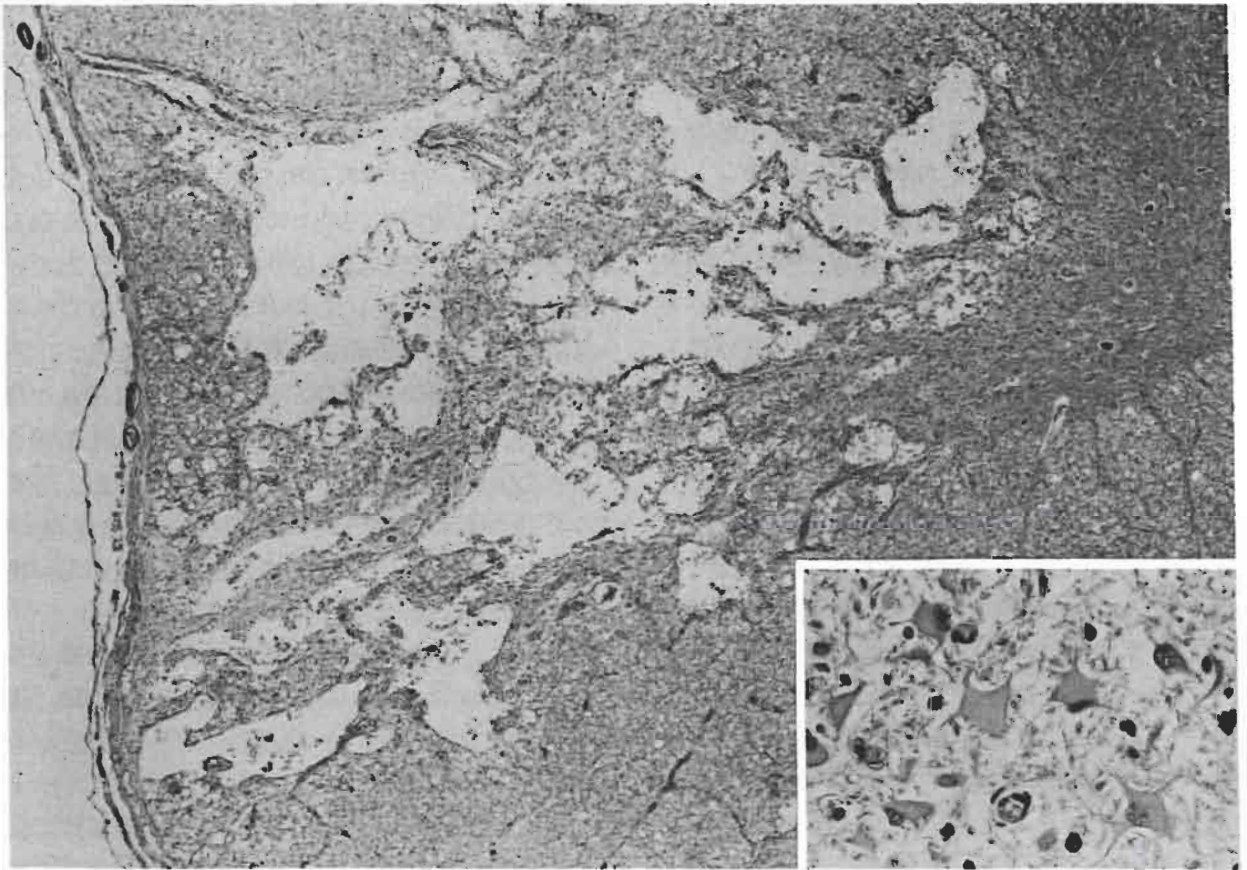


馬の脊髄軟化病変

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第31回獣医病理学研修会標本No.562



動物：馬，サラブレッド，雄，18歳。

臨床事項：昭和63年10月4日排尿困難と歩様異常を認めるとのことで診療を受けた。その後も歩様異常、起立困難の症状を繰り返し同年12月23日より症状が悪化したため予後不良として、平成元年1月10日に剖検された。経過中発熱は認められなかった。

剖検所見：尿道球腺の肥大。胃無腺部における広範な陳旧性糜爛，及び噴門部における粟粒大癒痕化糜爛数個。食道における最長7cmにわたる癒痕化線状糜爛多発。四肢関節症。盲腸における葉状条虫多数寄生。その他剖検所見からは歩様異常，起立困難を示唆する病変部は認められなかった。しかし，後日の検索により第五頸髄の左側索及び腹索において，第六頸髄付近にまで達する空隙形成ならびに軟化巣を認めた。

病理組織学的所見：提出標本では，白質が広範に破壊され欠損し（H E染色，×22），それら神経組織の破壊とともに著明な格子細胞の浸潤や，リンパ球，少数の好酸球の浸潤が認められた。また空隙及び空

隙周囲組織においては，脱髄とともにスフェロイド小体や，星状膠細胞の増殖（挿入図，H E染色，×320），膠原線維の増殖による線維化が認められた。またリンパ球，形質細胞，好中球，好酸球からなる囲管性細胞浸潤や，空隙部軟膜においてはリンパ球浸潤が見られた。また，第八頸髄背索においても空隙形成，格子細胞の浸潤などが認められた。

考察：脊髄の損傷には，異物の穿入，寄生虫の移行，脊髄周囲の腫瘍などによる圧迫，脊椎の骨折や脱臼，及び馬の脊髄性運動失調症などの症候群が考えられているが，本例は椎骨を含め脊髄周囲になんらの病変も認められないので，幼若糸状虫の迷入にもとづく機械的破壊によることが最も疑われた。さらに本例ではその病変から慢性病変であることが示唆された。虫体が未確認であり，好酸球の浸潤が軽度であったが，好酸球の浸潤は必ずしも脳脊髄糸状虫症に絶対的な所見ではないとの報告もある。

病理組織学的診断：馬の慢性脊髄糸状虫症。